

論文内容の要旨

専攻名	多文化社会学 専攻	氏名	岩崎 和彦
題名	「価値としての複言語主義」の日本における実践の可能性と課題 ——生涯学習を視野にヒッポファミリークラブの事例を通して		
<p>論文内容の要旨</p> <p>本研究の目的は、複言語主義の「価値として」の側面を日本において実践する可能性と課題を探究する事にある。複言語主義は、欧州評議会が2001年に多言語主義と区別して提唱した。多言語主義は、一つの社会において多様な言語が使用されている状態、およびそれを肯定する思想である。政策的には、公的機関や教育に多様な言語でアクセスできるようにする。別の言い方をすれば、単一の共通語を採用しない。それに対して複言語主義は、一人ひとりの人間が複数の言語を習得し統合して使用している状態、およびそれを肯定する思想である。多言語主義のもとでお互いの対話を成立させるには、個人が複言語「能力」を発揮して相手言語を習得する必要がある。多様性の肯定からは、どの言語についても「価値」を等しく認め、お互いが対等に習得し合う事が導かれる。住民の多言語化が進む日本においても、複言語主義の可能性や課題が議論されてきた。</p> <p>第1章では研究の背景と問題意識を提示した。未だに大きい「ことばの壁」を乗り越える方略として、単言語主義の利点と弊害を示し、別の方略としての複言語主義がある事を説明した上で、いずれの方略を取るにせよ、言語マジョリティが誰のことばを学ぶのかという課題が不可視化されてきた事を指摘した。</p> <p>第2章では先行研究を検討し、「価値としての複言語主義」の要点が言語の等価性にあり、それが人間の言語的平等の理念に基づく事を示した。次に、「価値として」の側面が複言語主義の教育で不可欠にもかかわらず、それを明示した実践研究が少なく、かつ学校内のものに限られている点を指摘した。さらに、研究の観点として、生涯学習を見通した「隠れたカリキュラム」の働き、学び手のマイノリティ/マジョリティ性、評価方法を課題として提示した。</p> <p>第3章では、第2章で指摘した課題に応える本研究の対象やリサーチクエスション、研究方法を提示した。学校外で40年以上も複言語活動を続けてきたヒッポファミリークラブ〔以下「ヒッポ」と表記〕とその会員を対象とする2段階の事例研究によって、次に続く実践の触発を目指すというものである。分析の観点は、生涯学習、マジョリティ特権、隠れたカリキュラムの3つとした。</p>			

氏名	岩崎 和彦
<p>第4章では、ヒッポの複言語活動がどのように形成されたのか、源流であるラボ教育センターに遡って検討した。最初は単一言語主義に基づく英語教育で始まり、その行き詰まりを模索する中で複言語化が試され、韓国語の導入が「価値としての複言語主義」への転機となっていた。ヒッポの設立後は、技術研修生のホームステイを受け入れ、そのことを学びたいという会員の声がマイノリティ言語のさらなる導入につながっていた。</p> <p>第5章では現在のヒッポにおける学びのシステムにおいて、言語の等価性や人間の言語的平等がどのように実現されているかを検討した。日本語と英語を含めた言語の同等な扱い、対象言語を線引きしない活動、ホームステイ先の多様化、参加者の「平らな関係」が特徴として明らかになった。</p> <p>第6章は本研究の中心であり、「価値としての複言語主義」に関わる会員の実践と意識を、聴き取りデータを素材として検討した。例えばHさんは、英語教育のみだったラボ教育センター時代から参加し、韓国語導入に関する対立を通じて、「ことばと人間は表裏一体」という認識を確立していった。Aさんは「国力」を基準にした言語の価値判断から、ホームステイ受け入れを通じて、「……語ではなく〇〇さんのことば」、「相手のことばを大事にしないのは、相手の人を大切にしないこと」という言語観に転換していった。Cさんは意思表示できない幼少期に会員となり、小学生になって辞めたいと思った時期を経て、海外でのホームステイや留学を経験して主体的に活動するようになり、お互いの理解と信頼のために、相手言語が未知でも手探りで習得しようとしている。一人ひとりの経験と、それに裏打ちされた認識は多様だった。同時に、「人」と結びついた「ことば」、特に自分が言語マジョリティである場合にマイノリティとなる相手のことばも習得するという経験と認識は多くの語り手に共通し、それが「価値としての複言語主義」を表現していた。</p> <p>以上の研究結果から、「価値としての複言語主義」の日本における実践に対して示された可能性と課題は次の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 学校外での複言語主義の実践と研究を強化する。 (2) 生涯学習の視野と「隠れたカリキュラム」の観点を結合して実践を構築する。 (3) 言語マジョリティの第2言語選択の理論化を進める（隣人言語が焦点）。 (4) 複言語習得の方法論を試行し、検証していく（実践可能性の保証）。 (5) 「価値としての複言語主義」を評価し触発につなげる方法を探究する。 	

Abstract of the Paper

Major Subject	Global Humanities and Social Sciences	Name	Kazuhiko Iwasaki
Title	Possibilities and Challenges of Practicing "Plurilingualism as a Value" in Japan: Through the Case of Hippo Family Club with a View to Lifelong Learning		
Abstract			
<p>The objective of this study is to explore the possibilities and challenges of implementing the aspect of "plurilingualism as a value" in Japan. Plurilingualism is considered an individual capability and a set of values necessary for realizing multilingualism in society. Proposed by the Council of Europe in 2001, discussions on the potential and challenges of plurilingualism have also taken place in Japan. This research, as a two-stage case study focusing on practices outside the school setting, addresses a gap in previous studies by examining the Hippo Family Club and its members. The analytical framework encompasses three perspectives: lifelong learning, majority privilege, and the hidden curriculum. Initially, the historical development of Hippo's plurilingual activities is examined, tracing the transition from monolingualism to plurilingualism. The current system is then analyzed, revealing equitable treatment of languages including Japanese and English, diversification of homestay experiences, and the establishment of "egalitarian relationships" among participants. Subsequently, the practices and awareness of members related to "plurilingualism as a value" are investigated using interview data. Individual experiences and the associated perceptions vary, yet a commonality emerges in the acquisition of the language of others, particularly when individuals, as language majorities, learn the language of minority speakers, embodying the essence of "plurilingualism as a value." Based on the research findings, identified points are those: (1) Strengthening plurilingualism outside the school setting, (2) Integrating lifelong learning perspectives with the "hidden curriculum", (3) Language majority's second language choices (with a focus on neighbors' languages), (4) Methodologies for plurilingual acquisition (5) Methods to evaluate and promote "plurilingualism as a value."</p>			